



蘇譜合

心

特 別
^ 5
6718
4



15
678
4

祇園奉納俳務連歌合巻の序
九十一中巻 雑

右指

くひのまゝにあらはれりて

意仙

かゝらぬとて

右

ねさちの代りてあらはれりて松乃木

可全

孫報よもいへる岩根の若じして

非道合巻四



九十一
九十二

右

心
あまのこころ

廉名

白糸の
あまのいと

右

の
あまのこころ

紹姓

三
あまのこころ

九十一
九十二

右

あはれなるはらへりあはれなるの心

あはれ

あはれなるはらへりあはれなる

あ

あはれなるはらへりあはれなる

あはれ

あはれなるはらへりあはれなる

あはれなるはらへりあはれなる

あはれなるはらへりあはれなる

あはれなるはらへりあはれなる

九十六

あ

あはれなるはらへりあはれなる

あはれ

あはれなるはらへりあはれなる

あはれ

あはれなるはらへりあはれなる

あはれ

あはれなるはらへりあはれなる

あはれなるはらへりあはれなる

ぐる作さななたたりりがが務むららみみほほんんささひひれ
ししうう。ああららままししららぬぬくくひひららめ

九十七中ぬ

た 務

ううのの務むややももんん務むららみみほほんんささひひれれををつつん

中ぬさぬ

るるのの務むららみみほほんんささひひれれををつつん

た

るるのの務むららみみほほんんささひひれれををつつん

永利

齒はととみみののららりり年ねんららのの回わい菜さい菜さいららそ

ああんん務むららみみほほんんささひひれれををつつん
ははららみみほほんんささひひれれををつつん
ああんん務むららみみほほんんささひひれれををつつん
ああんん務むららみみほほんんささひひれれををつつん
ああんん務むららみみほほんんささひひれれををつつん
ああんん務むららみみほほんんささひひれれををつつん
ああんん務むららみみほほんんささひひれれををつつん
ああんん務むららみみほほんんささひひれれををつつん
ああんん務むららみみほほんんささひひれれををつつん
ああんん務むららみみほほんんささひひれれををつつん

九十八中ぬ

た 務

門かど前まへよよららみみほほんんささひひれれををつつん

意他

懐之業陰ひしと申然らん

右

二まのんははしと申ふりて

函指

と申しあもせし

とよめやと秀句らめづらうはは

ら。句申とまふ然うとてくひお

しめりてのんははしと申ふりて

陰秘事しとらはるま

九十九

右

しほりてと申しあもせし

元隣

わんりてと親言の念般乃

右

八十一を一約とそみふ

退步

誰經云と申しあもせし

念般の故と申しあもせし

と申しあもせし

ち

白髪乃かきよ出むつらん

別巻

はみんよりわらわのまじり

ちの句をよのまじりしとらるる史記をよ

別傳の正系よまはぬをひきくま

母懐胎八十一載遠遠孝樹下廻割片膝而

難もやらるるべし

んもやのちもあつて

るはらもだるるびと

百二や敷

后 傍

世乃まわや年とははらへ

傍 傍

鉄炮とゆりれらるる

ち

らるるらるる

可全

和田の原をそられや

和田の原をそられや

和道 卷四

はぎわらふあひらきりらりらり風流の野
^{まじ}あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ

百三十四

おの

あはれなるのさしあはれしきくあはれ

賞

あはれなるのさしあはれしきくあはれ

右

あはれなるのさしあはれしきくあはれ

一

あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ
あはれなるのさしあはれしきくあはれ

右

そとにけしむるはくはくしむる

改好

しんじゆのそとにけしむるはくしむる

しんじゆのそとにけしむるはくしむる

しんじゆのそとにけしむるはくしむる

しんじゆのそとにけしむる

百五

右

しんじゆのそとにけしむるはくしむる

恭雅

しんじゆのそとにけしむるはくしむる

右

しんじゆのそとにけしむるはくしむる

朝

しんじゆのそとにけしむるはくしむる

しんじゆのそとにけしむるはくしむる

しんじゆのそとにけしむるはくしむる

しんじゆのそとにけしむるはくしむる

しんじゆのそとにけしむるはくしむる

こころもさかきつあつぎきの料ねして

七揚

よきうが中よ国然がらんせら

永利

まじらうららぬ敷もまじせらん

あがかりがけりたう考うらよ

らう中よもゆらぬのゆれうび

てめうらうおまゆりうらうらよ

百九やぬ

右

ま作のさふそこのらりしんて

右次

格ふらうらうらにりしあらん

七揚

こころの系の色よらん一

友光

とほもくもゆらぬあはれんあし

れつとあふいふまおらうらりあ

系脈うらうらうらうらうらうらし

うらうらうらうら

百十中

右指

とんぼりさの月日新

カ

はづらぎくくくくくくくく

カ

とんぼりさの月日新

カ

はづらぎくくくくくくくく

とんぼりさの月日新

新なるへきんがもあやくらら
り。とんぼりさの月日新
百十中

右指

とんぼりさの月日新

カ

はづらぎくくくくくくくく

右

とんぼりさの月日新

カ

はらへくはつし

百十の中敷

左

種もろく思ひもろくまじりし

春矣

貧乏をぬくは中乃おほひし

右

うらびー膳乃あーのみこは

一言

うきりの後いまは乃達た

まて乃うけ物も貧乏の中のおほひも
みふものうらびるる。物より表
事よーいりあーあつる。右

百十の中敷

右

時分ゆがやのははははは

三朝

布衣物引もろくろくろく

右

元徴

出離生死煩惱おぼひのせきん

ち

あつしよふくしんがむね

改め

六道の道は地底のまじりて

さよひの道びく地底はうらあきん

る物く物ごとく地底はうらあきん

る物くん

百十七巻

たね

くまのりんたごきやのむ

赤糸

まほのらうたごきやのむ

右

所なるりんたごきやのむ

まきりん

あつしよふくしんがむね

あつしよふくしんがむね

あつしよふくしんがむね

Handwritten text in cursive Japanese style (sōsho), likely a letter or a page from a diary. The text is written vertically on the right page of an open book. It consists of approximately 12 lines of fluid, connected characters. Some characters are written in a more formal style, possibly indicating specific names or dates. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

卷之三
行旅記

